善隣

No.541 通巻808

2023年（令和５年）11月１日発行（毎月１日発行）

2023 11

一般社団法人 国際善隣協会

善隣　目　次　2023年11月号

公開講演会記録

中城村の沖縄戦 ……濱口寿夫　2

ボリビア開拓記外伝 ……渡邉英樹　11

満洲唱歌に見る満洲の原風景
—消えゆく唱歌を惜しんで ……藤川琢馬　19

陶々俳壇 ……馬場由紀子　28

中国ウォッチング ……編・訳　上松玲子　30

協会通信・会員だより・同好会だより ……　32

2023年11月の行事予定 ……　33

みんなの写真館 ……　32
（姜晋如、新宅久夫）

善　隣　第541号　通巻808号
2023（令和５）年11月１日発行
発行所　〒105-0004　東京都港区新橋1-5-5
一般社団法人　国際善隣協会
TEL　03（3573）3051
FAX　03（3573）1783
発行人　藤沼弘一
編　集　原田克子
編集協力　朝　浩之、山谷悦子
印刷所　㈲ゆにおんプレス
TEL　048-834-1201
定価　一部400円　年額4,800円
振替　00120-0-145956
国際標準逐次刊行物　ISSN 0386-0345
ⓒ禁無断転載

当協会は、中国ならびに近隣諸国との相互理解を深め、友好親善・交流を推進しています。
一般社団法人　国際善隣協会

公開講演会記録

中城村の沖縄戦

中城村護佐丸歴史資料図書館館長　濱口寿夫

一、はじめに

本日は皆様に中城村における沖縄戦について発表する機会を与えてくださりありがとうございます。太平洋戦争末期の１９４５年３～６月に行われた沖縄戦はマスコミや映画等でたびたび取り上げられていますが、そこでクローズアップされるのは最終盤の沖縄島南部での戦いであることが多いようです。そのため、南部の戦いが沖縄戦そのもののイメージになっているように感じます。一方、沖縄島中部の中城村は米軍が読谷―北谷に上陸した後、日本軍司令部のある首里に進攻する途上にあり、沖縄戦の比較的早い段階で戦線が通り過ぎました。そのためか、ここでの戦闘は沖縄においてもあまり注目されていません。しかし、米軍が沖縄島に上陸してから日本軍終焉の地である摩文仁村（現糸満市）まで進攻していく過程を見ると、西海岸の浦添村（現浦添市）牧港と東海岸の中城村和宇慶を結ぶラインで２週間以上戦線が膠着していることに気付きます。ここは、「首里防衛ライン」と呼ばれる日本軍主陣地の外郭であり、日本軍が米軍に対して最も激しく応戦したところなのです。

二、沖縄戦前の状況

沖縄戦前の日本の状況を述べますと、１９４２年６月にミッドウェー海戦、１９４３年２月にガダルカナル島の戦いに敗れて太平洋地域の制海空権争いにおいて劣勢となります。１９４３年９月に「絶対国防圏」を設定しますが、１９４４年６月のマリアナ沖海戦で敗れたのに続き、７月にマリアナ諸島のサイパン、８月に同諸島のテニアン・グアムが陥落して絶対国防圏は崩壊し

ました。これで米軍はテニアン等の飛行場を利用して日本本土に向け爆撃機を飛ばすことが可能になりました。同年10月にレイテ沖海戦で敗れ、1945年3月には硫黄島が米軍に占領されています。連戦連敗の果てに沖縄戦は行われたのです。

1944年7月のサイパン陥落を受けて大本営は沖縄戦の準備に着手し、この地域の守備を強化します。沖縄守備軍（陸軍）を第32軍といい、その沖縄島における兵団は第9師団、第24師団、第62師団、独立混成第44旅団等で構成されていました。ただし、第9師団は1944年12月から翌年1月にかけて、台湾に抽出されてしまいます。当時、大本営は米軍が台湾と沖縄のどちらに来襲するか分からない中でこの判断をしたのでした。

1944年6月まで、大本営は沖縄ではほとんど飛行場建設だけやっています。沖縄を不沈空母にして南方での戦いを支援させるという考えです。7月以降に地上戦の準備を始めてからも、1944年9月中旬～10月中旬には陣地構築を一時止めて飛行場建設に全力投球しています。結局のところ時間切れで多くの飛行場が未完に終わるのですが、大本営がいかに航空基地を重視していたかがうかがわれます。中でも特に大事なのが伊江島、北（読谷）、中（嘉手納）の3飛行場でした。第32軍は1944年夏の時点では、独立混成第44旅団を沖縄島北部（伊江島飛行場含む）、第24師団を同中部北半（北・中飛行場含む）、第62師団を同中部南半、第9師団を首里那覇・沖縄島南部に配置して島全体を防衛する構えでした。米軍を迎え撃つ方針は「沿岸決戦」です。しかし11月に第9師団の台湾抽出が決定されると、第32軍は兵団の配置転換を行い、独立混成第44旅団を北部・中部北半、第62師団を中部南半・首里、第24師団を南部に移動させました。そして1945年1月に再び配置転換を行い、独立混成第44旅団を南部知念半島に移動させます。首里を中心とする狭い範囲に兵団を集中し、縦深陣地に立てこもって「持久戦」を行うことにしたのです。これは伊江島・北・中の3飛行場放棄を意味する大変な方針転換ですので、大本営は驚愕します。3飛行場を取られると、米軍の本土空襲が容易になるからです。大本営は沖縄に人を派遣するなどさまざまな手段を使って北・中飛行場を守るよう執拗に説得を試みますが（伊江島飛行場についてはあきらめたか言及がない）、第9師団抽出で戦力の3分の1近くを失った第32軍はこれに応じませんでした。大本営と第32軍は基本方針に齟齬をきたし、関係が悪化したまま沖縄戦に突入しました。

三、中城村における戦闘

中城村における戦闘を、①前方部隊、②前進基地、③首里防衛ラインのそれぞれにおける戦いごとに説明します。なお、①には、1945年4月1日の米軍上陸以降の状況を含みます。

①前方部隊の戦い（1945年4月1～5日）

前方部隊とは、第62師団独立歩兵第12大隊約1200人のことで、大隊長

（賀谷與吉）の名をとって「賀谷支隊」とも呼ばれます。前方部隊は北・中飛行場を含む中部北半に配置され、その主たる任務は「この地域における日本軍の守備が厳重であるかのように敵を欺瞞する」ことでした。北・中飛行場を守れとうるさい大本営への申し訳として配置したとの見方もあります。これに対する米軍第7歩兵師団は約2万2千人で、圧倒的な戦力差により前方部隊ははじめから押しまくられることになります。なお、この地域には特設第1聯隊2800人も配置されていましたが、これは元来飛行場整備の人員で、十分な武器もなく戦力にはなりませんでした。

米軍は1945年3月23日から空襲と艦砲射撃で沖縄島を叩いた後、4月1日に第6海兵師団、第1海兵師団、第7歩兵師団、第96歩兵師団を上陸させました。上陸後、第6海兵師団は北へ、第1海兵師団は東へ、第96歩兵師団は沖縄島西側を南下、第7歩兵師団は中城村のある沖縄島東側を南下します。北・中飛行場は上陸当日の午後2時までに米軍が占領しました。第32軍は米軍が首里防衛ラインに達するまでは本格的な手出しをしない作戦で、この時期はほぼ前方部隊だけが応戦し、人員を損耗しながら後退を続ける形になりました。

米軍は、4月1日夜には北谷村（現北谷町）桃原―越来村（現沖縄市）諸見里のラインまで進出しました。4月2日には、中城村（現北中城村）島袋、喜舎場に進み、賀谷支隊は宜野湾村（現宜野湾市）野嵩と中城城跡に下がりました。4月3日は野嵩、中城城跡で戦闘が行われ、同日夜に城跡の日本軍部隊は撤退します。4月4日は野嵩、中城村新垣で戦闘が行われました。賀谷支隊の前方部隊としての役割はここまでで、4月5日には中城村北上原の前進基地（161・8高地）に集結し、同日夜に首里防衛ライン内側の西原村（現西原町）幸地に下がりました。

②前進基地での戦い（1945年4月5～6日）

第32軍は首里防衛ラインの外側、宜野湾村大山・神山と161・8高地の3か所に「前進基地」を設置していました。前進基地は、首里防衛ラインの外にあって、敵情偵知、敵の前進遅滞、前方部隊支援を目的としていました。161・8高地の前進基地には独立歩兵第14大隊第1小隊を中心とする150人が配属されていました。日本軍は同高地に地雷原、鉄条網、トーチカを設置し、アリの巣のようにトンネル・塹壕を掘り廻らせて攻撃拠点間を自由に移動できるようにしていました。

4月5日、米軍が攻め寄せますが日本軍が撃退しました。米軍は、砲撃で日本軍の陣地を徹底的に叩いてから、歩兵と戦車で攻めてきます。日本兵は米軍が砲撃している間は地下に潜んでしのぎ、歩兵・戦車が進んでくると至近距離から銃撃、手榴弾、梱包爆薬等で対抗しました。4月6日は朝からこのような攻防が7～8回繰り返され、午後3時ごろには米軍が丘上部を占領し、「馬乗り攻撃」の態勢になりました。「馬乗り攻撃」とは、地下陣地にこもる敵に対し、直上部から手榴弾、毒ガス等で攻撃を加える状態のことです。地

下の日本兵は夜間、米軍の攻撃が停止した隙に脱出して後方に下がりました。米軍は基本的に夜間の地上戦を行わないので、夕方まで持ちこたえればひと息つけるわけです。この時の日本軍守備隊の生存者は30人でした。この戦闘で看護要員として同行していた地元女性18人のうち13人が亡くなっています。

③首里防衛ラインでの戦闘（1945年4月7～23日）

沖縄戦において米軍が最も苦戦した戦いです。日本軍は、中城村西側台地上に第62師団独立歩兵第14大隊、同第12大隊（賀谷支隊）、台地に続く斜面地と東側平野に同第11大隊を配置していました。首里防衛ラインで日本軍が健闘した要因は、①比屋良川沿いの崖と中城湾に臨む斜面地の尾根が米軍の障壁になったこと、②陣地が地形を利用して入念に構築されていたこと、③多数の陣地が相互支援できるよう配置されていたこと、④第62師団は陣地を構築した兵団であり環境を熟知していたこと、⑤沖縄島における本格的戦闘の初戦であり兵の大部分が健全だったこと、⑥大型砲を持つ軍砲兵隊が参戦したこと、が挙げられます。軍砲兵隊は98式臼砲（300kg砲弾）、15サンチ榴弾砲、15サンチ加農等強力な火力を持っていましたが、これまでの戦いではあえて出動していませんでした。こちらが撃てば、米軍から撃ち返され砲が破壊される可能性があるので、首里防衛ラインの戦いまで温存していたのです。

4月7日、米軍は戦車を伴って中城村東側平野部に進出してきましたが日本軍が撃退しました。和宇慶の北北西に155高地、西側に157高地、ユージヌモー、南西にスカイラインリッジという高所があり、これらすべてに日本軍の陣地がありました。米軍は平野部を南下して首里に迫りたいのですが、近接する高所から狙い撃ちされるのでそれができません。西側の日本軍陣地群を制圧しなければここを突破できないのです。特に重要なのは、平野部に突出しているスカイラインリッジでした。現在、ユージヌモーからスカイラインリッジにかけての稜線には病院やホームセンターがあって、かつて激戦地であった面影はありません。

4月8～9日は首里防衛ライン全線で激戦が行われました。米軍は平野部の津覇集落まで進出します。4月10～11日、和宇慶方面で戦闘が行われ、日本軍が米軍を撃退します。西側高所の日本軍陣地群が米軍の南下を阻む状況が続きます。

4月12日、日本軍が夜間攻撃を仕掛けます。夜陰に紛れて戦線をすり抜け米軍支配エリア深く侵入して米軍の混乱を誘起し、その後正面から攻勢に出る計画でしたが失敗しました。夜間攻撃は激戦続きで余裕のない第62師団ではなく、第24師団の部隊が南部から出てきて行いましたが、地理に不案内な兵による暗夜の浸透作戦は困難でした。

4月13～18日は米軍の攻撃が不活発となります。米側の記録『Okinawa: the last battle』（1948）は、米軍はそれまでの戦闘で多大の損害を受け増援が来ないため「首里陣地前面において失勢の状態に陥った」と記しています。いったん攻勢の手を緩めて態勢の立て直しを図る必要があったのです。日

本軍はどうかといえば、最前線の部隊は戦力が3分の1から2分の1まで減少し米軍以上に疲弊していました。この頃、他の地域で何が行われていたのか見てみましょう。前方部隊が戦った中城村島袋には、4月4日に難民収容所が設置され、収容された住民の「戦後」が始まっていました。収容所内の青空学級では子どもたちが勉強しています。一方、南部では戦火は遠く、まだ「戦前」です。同じ島内で、戦線との位置関係によって戦前、戦中、戦後が同時に存在しているのです。一方、周辺海域では日本海軍による特攻（菊水作戦）が実施され米艦船に損害を与えましたが、戦局を転換させるには至りませんでした。連合艦隊による海上特攻も行われ、4月7日には戦艦大和が鹿児島県坊津沖で撃沈されています。

4月19日、首里防衛ラインにおいて米軍の総攻撃が始まりました。米軍はスカイラインリッジに侵入しますが、日本軍は砲兵支援の下、戦車に肉薄攻撃を行い夕刻までに米軍を撃退しました。日本軍守備隊はほぼ全員死傷という状況でした。4月20日、午前7時から米軍の歩兵と戦車がスカイラインリッジ西のユージヌモーに侵攻しました。終日死闘が行われ、米軍がその北側斜面を占領しました。日本軍は斬り込み攻撃をかけますが奪回できませんでした。4月21日、米軍がユージヌモーからスカイラインリッジを攻撃してきて、夕刻、全稜線を占領しました。米軍にとっての、この地域での一番の難所がクリアされたことになります。4月22日、首里防衛ラインはあちこちで崩壊の兆しが現れてきました。4月23日、第32軍は消耗の激しい第62師団を前線から下げ、第24師団と交替させることにしました。このとき、第24師団は第62師団が保持していた位置に着くことができず、数キロ南に下がった位置に入りました。ついに米軍が首里防衛ラインを突破したのです。

その後の戦闘は本日のテーマ外ですので、簡単に述べます。浦添村前田高地（ハクソーリッジ）や那覇市安里52高地（シュガーローフ）などでの激戦はありつつも、米軍は着実に第32軍司令部のある首里に近づいていきます。司令部は5月22日に南部喜屋武半島撤退を決断し、同27日に首里を放棄しました。第32軍の南部撤退により、日本軍とすでにこの地域に避難していた住民が混在することになり、住民被害を大きくしました。6月19日、司令官牛島満中将は「各部隊は生存中の上級者の指揮で最後まで戦え」という主旨の最後の命令を出し、6月23日に自決します。このときが沖縄戦における日本軍の組織的戦闘の終了であり、現在「慰霊の日」として沖縄戦のすべての戦没者を追悼する日となっています。

四、沖縄戦で戦った人々

沖縄戦で戦った人々を整理しておきましょう。日本軍は陸軍9万、海軍1万の合計10万人です。この中には、沖縄で防衛召集された住民・学徒等が2万2千人以上含まれています。対する米軍は54万8千人で、このうち18万3千人が上陸部隊でした。死亡者は日本側18万8136人で、その内訳は沖縄

以外の都道府県出身兵６万５９０８人、沖縄出身兵・軍属２万８２２８人、一般住民約９万４千人となっています。米軍の死亡者は１万２５２０人でした。

軍人には徴兵検査に合格して入隊した現役、これを終えて予備役になった後に臨時召集された人、17歳以上で徴兵検査前に志願して入隊した人がいます。沖縄では17～45歳の男性で入隊していない人を全員に近い形で防衛召集しています。この人たちは正式の軍人ですが、装備・訓練が不十分で軍人であるという自己認識の薄い人も多く、実態としては一般住民に近い存在でした。さらに14歳以上の男子学徒（師範学校、旧制中学校の生徒）については志願により入隊させ、鉄血勤皇隊、通信隊を構成しました。この志願には必要な手続きがとられていない例が多く、強制に近い場合もありました。

女子学生も16歳以上は看護要員等として日本軍と行動を共にしました。「ひめゆり学徒隊」等です。これの法的根拠については、学徒勤労令、国民徴用令、女子挺身勤労令等複数の説があり、はっきりしません。彼女たちの立場も、研究者によって軍属であったり準軍属であったりします。

学生でない若者や、老人は動員を免れるかというと、そうはいきません。１９４５年３月23日の閣議決定で、初等科修了（小学校卒業）から65歳までの男子で防衛召集等に漏れた者、初等科修了から45歳までの女子で学徒隊に入っていない者は「義勇隊」に入ることになりました。66歳以上の男子でも志願すれば入隊できますので、沖縄住民で足腰の立つ者はすべて動員するという方針です。これを沖縄では「根こそぎ動員」と呼んでいます。義勇隊は基本的に陣地構築、炊事、看護等に従事しますが、戦闘に参加する場合もありました。

五、沖縄戦と一般住民

第32軍の基本方針は、戦争に使える者はすべて動員し、使えない者は島外に疎開させるというものです。しかし、「老幼婦女子」の疎開が始まった１９４４年７月には南西諸島の制海権はすでに米軍にあり、航海に危険が伴うため疎開の機運は高まりませんでした。その結果、沖縄島から九州に６万人、宮古・八重山から台湾に２万人の疎開にとどまりました。

１９４５年２月に沖縄県が沖縄島中南部住民の北部疎開を始めます。県は10万人を計画していましたが、移動したのは３万人でした。３月23日に米軍が上陸に向けての空襲を始めると、さらに５万人が北部に避難しましたが、それでも20万人近くが中南部にとどまっていたと思われます。

『中城村の沖縄戦　証言編』（中城村教育委員会、２０２２）には１６４の証言が収録されています。これらの証言から、避難時期と避難先の関係や住民被害、軍民間、住民同士の相互作用を整理してみましょう。

避難（疎開を含む）の時期と行先が分かる証言は１２０あります。避難時期を①１９４４年10月９日以前、②１９４４年10月10日～１９４５年３月22日、③１９４５年３月23～31日、④１

９４５年４月１日から居住地への米軍到達まで、の４つの時期に分けて避難先を見てみます。１９４４年10月10日には「十・十空襲」、１９４５年３月23日には米軍の上陸に向けた空襲・艦砲射撃開始、４月１日には米軍の沖縄島上陸がありました。これらの出来事は、住民の行動に大きな影響を与えたと考えられるので、これらで時期を区分したのです。時期①の避難先はすべて日本本土（20例）、つまり学童を中心とする九州疎開です。時期②の避難先はほとんど北部で（16例）、日本本土と南部が１例ずつでした。２月以降の沖縄県の避難指示に従って移動した人たちが多かったと思われます。時期③は米軍の本格的な攻撃に驚いて住民が移動を始めた時期で、避難先は南部（7例）と北部（5例）に分かれました。この判断には、距離や避難先の食料事情等さまざまな要因が関わっていると思います。時期④は米軍が間近に迫ってくる時期です。この時期の避難者が最も多く、その避難先は圧倒的に南部です（42例）。米軍が北から来襲するので、北部へは行きたくとも行けないのです。南部にも行けず、宜野湾村など中部他村に逃げたのは３例でした。また、年寄りを抱えて長距離移動ができない、同じ死ぬなら地元で死にたい等の理由で中城村内の壕や墓にとどまった例が25ありました。

避難証言には、同行した人たちの人数やその死傷等の状況を記述したものが１０６あります。これらの証言から、避難先地域と同行者の死亡率を見てみます。なお、米軍に収容された後の死亡はカウントしていません。また、証言者本人は戦後まで生存していることが明らかなので死亡率の計算から除きます。南部避難同行者の死亡率が約34％と最も高く、北部避難同行者と中城村にとどまった人たちは２～３％でした。中部避難同行者の証言は３つのみですが、その死亡率は15％でした。この結果から、南部で戦闘に巻き込まれて亡くなる人が多かったことが分かります。避難グループ全員が死亡した場合は証言が残りませんので、実際の死亡率はこれより高くなるはずです。中城村での死亡率は相対的に低く、北部避難同行者と同程度でした。「足が悪くて地元に残った高齢者が助かり、南部に避難した家族が亡くなった」等の証言が多数あります。

沖縄戦では、戦闘だけでなく栄養失調とマラリアにも住民は苦しめられました。栄養失調とマラリアについて本人が体験したことや、患者を見聞した記述のある証言をカウントしました。見聞は原則的に直接的なものに限り、伝聞は除いていますが、本人の親族に関する伝聞は信憑性が高いと考えられるので含めています。栄養失調は全21例中14例が、マラリアは全27例中22例が北部におけるものでした。「南部は砲弾との、北部は飢え・マラリアとの闘い」と言われることがありますが、証言とよく一致しています。マラリアの体験・見聞は中城村帰郷後に発症した２例を除き収容所におけるものです。栄養失調は戦場においても発生していますが、やはり収容後が多くなっています。

証言には、軍人と住民、住民同士のさまざまな相互作用が記述されていま

す。これらを「排他行動」と「協調行動」に分け、行動の発生時期や場所、具体的内容を見てみましょう。沖縄戦では、避難壕からの追い出し、小さな子どもを連れた住民への恫喝や排斥、スパイ視とこれに伴う暴力等、日本軍から住民への迫害が多くあったと言われています。そこで、まず軍民間の排他行動の発生数を見てみます。時期は、沖縄島の戦闘が実質的に始まる１９４５年３月23日より前と、それ以降に分けています。軍民間の排他行動は30例記述されていますが、そのうち23例は３月23日以降の南部においてのものです。その内訳は、軍人から住民への「壕・居場所からの追い出し」10例、「壕等の使用拒否」２例等となっており、米軍の攻撃から身を守るための資源（壕）を巡って競争状態となり、武力をもつ軍人が住民を排除している状況が見て取れます。３月22日以前の排他行動は、住民から軍人への１例のみでした。排他行動は日本軍が敗走・潰乱状態になった時・場所で多く発生したことが分かります。軍人による子ども連れ住民への迫害やスパイ視はそれぞれ１例と３例でした。

軍民間の協調行動（全59例）は３月22日以前に36例あります。「軍民相互」の協調行動が最も多く（24例）、住民から軍人へ９例、軍人から住民へ３例の順となっています。「軍民相互」の協調行動とは、具体的には軍人と住民による酒食を共にしての歓談や兵士と子どもが遊ぶこと等です。住民から軍人への協調行動はすべて食料等の提供です。ただし、役場等の指示による義務的な提供はカウントしていません。「空腹の兵隊が気の毒になって、そっとイモを渡した」等の自発的な行動を数えています。軍人から住民への協調行動は物品や情報の提供です。これらの事例のほとんどは中城村内で起こっています。戦闘が始まる前は、同じ地域に住み、共同で陣地構築等を行う過程で、軍人と住民が親しい関係になっていることがうかがわれます。３月23日以降は、意外なことに、南部において軍人から住民への協調行動が15例見られました。内容的には情報提供が多いですが（５例）、食料（４例）や薬品等物品（２例）の提供も見られます。この時・場所では、軍人から住民への排他行動が多いのですが、協調行動もあったわけです。社会的属性だけでなく個人の人格が行動に現れたということでしょうか。

住民同士の排他行動は48例記述され、すべて３月23日以降です。うち34例は南部で発生していて、住民同士の場合も厳しい状況の中で排他行動が多くなることが分かります。その内訳は、避難民から地元民への排他行動が20例と最も多く、次いで地元民から避難民への８例、避難民同士の６例となっています。避難民から地元民への排他行動はすべて農作物等食料の盗みで、地元民から避難民への排他行動は盗みに対する攻撃的反応（威嚇等）です。食料を巡って、避難民と地元民の間に争いが発生したことが分かります。北部で発生した排他行動９例も、その方向性や内容は、南部と同様でした。避難民同士の排他行動の中には、子ども連れへの迫害が３例ありました。泣く子ど

もとその親を壕から排除しています。

住民同士の協調行動は20例記述されていて、1例を除き3月23日以降の記録です。主な内訳は南部における地元民から避難民への協調行動が6例、避難民同士が4例、同様に北部において4例、2例となっています。地元民から避難民への協調行動のほとんどは壕・居場所等の提供です。避難民同士の協調行動は、壕、情報、食料の提供等が1～2例ずつありました。

六、おわりに

おわりにあたり、今回のお話を準備する過程で感じたことを述べたいと思います。まず、随所で日本軍の判断の遅さが目立ちました。サイパンが陥落するまで沖縄戦の準備を始めないので、安全な住民疎開が可能な時機を逸しています。沖縄戦でも首里陥落の直前まで次の主戦場を定めていませんでした。沖縄戦が始まるまでに決定されていたら、住民はそこを避けて避難することができたかも知れません。一般的に、ある作戦を行おうとするときは最悪のケースも想定して次の手を検討しておくべきだと思います。日本軍はそれをしないので対応が後手後手になります。太平洋戦争自体が「成算なき戦い」と言われますので、詮なきことかも知れませんが、場当たり的な行動が戦争をする上で不利に作用したばかりでなく、住民の被害拡大にもつながったのは残念なことです。

戦争証言の重要性も改めて認識しました。ひとつひとつの証言は、膨大な沖縄戦のごく一部についての個人の認識を示すものであり、全体像を伝えるものではありません。しかし、それは実体験に基づく生データという点で貴重です。今回、中城村の証言を分析してみたところ、これまで言われてきたことと一致する結果が多い一方で、意外なものもありました。住民同士の排他行動がそれです。一般的な言説において、住民は被害者としてのみ語られることがほとんどです。しかし、証言では子ども連れ家族の壕からの排除等、住民による住民に対する排他行動が語られていました。これについて大きな声でいうのははばかられるのかも知れませんが、「普通の人が鬼になってしまう」ことも戦争の忘れてはならない側面だと思います。沖縄県には、戦後のさまざまな時期に県や市町村が収集した膨大な証言記録があります。これらが伝えている現象を先入観なく分析することが、住民にとっての沖縄戦の実態に近づくうえで非常に重要だと思います。

（２０２３年７月13日・公開講演会）

筆者略歴（はまぐち・ひさお）

１９５９年神戸生まれ。早稲田大学教育学部卒、琉球大学理学部修士課程修了、九州大学農学部博士課程中退。１９９０年から沖縄県教育庁職員として高校、博物館、文化財課等に勤務。２０２０年、沖縄県を定年退職し中城村護佐丸歴史資料図書館長となり現在に至る。専門は海洋生物学。著書に『貝のストーリー』（東海大学出版部、共著）など。

公開講演会記録

ボリビア開拓記外伝

（一社）日本ボリビア協会相談役　渡邉英樹

戦後の混乱と食糧難の時代に幼少期を過ごした私は、海外移住にあこがれを抱き続けて、１９６５年に設立２年目の海外移住事業団に就職しました。

そして、ボリビア国の日本人移住地への支援に関わることになります。

その時の体験を沖縄の『琉球新報』に３年60回にわたり連載しました。

それに加筆したものが、沖縄本土復帰50周年の２０２２年、琉球新報社より『ボリビア開拓記外伝』として出版されました。

今さら「なんで移住だ」と思われる方もいると思いますが、移住は紛争・戦争と深い関係があり、ロシアのウクライナ侵攻による何百万人という海外への避難移住にも見られるように極めて今日的な問題であります。

日本もかつて、戦後の食糧難・就職難に有効な政策を見出せない時期があり、政府が海外移民を奨励した時代がありました。

現在は、逆に海外からの移民を受け入れる国となっていますが、異文化の人々といかに共生を図っていくかという命題を突きつけられています。

日本移民の苦労の歴史を辿り、それを反面教師として、より良い異文化共生社会の構築を考えるきっかけとなることを願っています。

本稿のタイトルを本と同じ「ボリビア開拓記外伝」としましたが、沖縄県民のボリビア移住は、当初から苦難続きで、そこから脱却しようとしてとった起死回生策も常軌を逸する事態の連続で、当時は公言をはばかれることばかりだったので、「外伝」としました。

しかし、これはほんとうにあったことであり、リアルな正史です。

本題に入る前に日本人の海外移住の歴史について簡単に触れておきます。

明治以降の日本人の海外移住は当初

はハワイとカリフォルニア州が主流でした。ところが、黄禍論と日本人の勤勉さがアダとなって、他の移民たちの妬みをかって、排日運動が激しくなります。１９０７年「日米紳士協約」によって日本はアメリカへの移民を自粛せざるを得なくなりました。その代わりとなったのがペルー、そしてブラジルでした。しかし、ペルーでのサトウキビ畑での労働は劣悪で各地で集団脱走が起きています。

そうした人々が活路を求めたのがボリビアのリベラルタ周辺のアマゾン河上流域でした。

アンデス越えの様子については、私が親しくしていた新垣庸英さんの日記がつとに有名です。１９１６年、庸英さんたち一行38人はアンデス越えの途上で見つけた同胞の墓の前で、志半ばで亡くなられた人の無念さに想いをはせつつ悼みました。

「汝の骨は、此の雪中に朽つるとも汝の進取の気象に富める霊は永久に止まり、後進の同胞を激励し、汝のあこがれ居たる森林地方の宝庫も我が同胞によって開発せられること、難事にあらざればなり」と庸英さんは、その日の日記に綴っています。

１９０８年にガソリン自動車が発明されタイヤの需要が急激に拡大されます。

当時、タイヤの原料となるゴムの樹はブラジルとボリビアのアマゾン河上流域にしか植生していなかったからです。天然ゴムの樹液を採集して固めたボラチャの対価として元締め会社に支払われたのが英国の１ポンド金貨であったからです。

金鉱山に入らなくても金を手にすることができたためゴールドラッシュとも言われました。ゴムの苗木が東南アジアに持ち出されて大規模なプランテーションができるまでの最盛期には約２千人の日本人がいたと推定され、当時は南米最大級の日系人社会を築いていました。

ゴム樹液採集で得た資金を元手に農業、行商、仕立屋、瓦職人等々特技を生かして安定した生活をし、社会にも貢献して尊敬を得るまでになっていました。

それが第二次世界大戦の敗北によって事態は一変します。

そのときの様子を日系ボリビア人の国民的作家で詩人のペドロ・シモセ氏が「歴史を持たない人々の物語」という一文で綴っています。その一節をご紹介します。

「リベラルタの日本人社会は完全にボリビア社会に同化しており、その経済力だけでなく、ボリビア社会とりわけリベラルタの地域社会への貢献が認められて尊敬されていた。しかし突然、第二次世界大戦という嵐のような逆風が日本人の夢を吹き飛ばした」

「日本は戦争に負けた。戦いに敗れると、連合国側の勝利を盾にし、またアメリカ合衆国のやり方をまねて、地域のボスたちがドイツ人と日本人を追い詰め、財産を接収した」「彼らは作物をなぎ倒し、収穫物を燃やし、豚、馬、牛を殺した。すでにボリビアに帰化していた元日本人の農業者と商人は貧困のどん底に突き落とされた。１９４５年以降、ドイツ人や日本人の子ど

もであることは不名誉なことであり、屈辱と侮辱と恥辱に耐えねばならなかった」と記されています。その結果、この人たちは日本人であることを隠し、自分の子どもたちにさえ自らのルーツや日本のことを一切語らなくなってしまいました。

日本語が分からず自分のルーツも分からずアイデンティティーを失った深い孤独を生きる日系人の悲しい誕生です。

ところが、自らがこんな苦境の中にありながらボリビアの沖縄県人たちは焦土と化した本国沖縄の人々を救おうと立ち上がります。「沖縄戦災救援会」（具志寛長会長）を立ち上げ、寄付を募り本国沖縄に救援物資を送り、さらに積極的救援活動として、本国の人々に夢を与えようと、ボリビアに「沖縄村」を建設すべく動き出したのです。

この「沖縄村建設構想」はボリビアの未開の東部平原を開発したいというボリビア政府の思惑と戦後の混乱に有効な政策を見出せない琉球政府さらには占領政策を円滑に行いたいという米国政府の思惑とが合致して、事は一気に運ばれていきます。「うるま移住組合」を設立し、1万5千ヘクタールの土地の払い下げを受けます。

米国スタンフォード大学教授ジェームズ・ティグナー博士の「移住地として適地である」という報告が決め手となり開拓移民の募集が開始されます。すると4千人にもおよぶ移民応募者が殺到したのです。その中から最初の先発隊として第1次・第2次移民の４００人が選ばれました。

那覇港を出港して南アフリカの喜望峰を回って45日の船旅の後ブラジルのサントス港で下船。それからは約３千キロの鉄道の旅です。木炭蒸気機関車ですから、薪を自らが調達し、線路脇で自炊をしながら、約1週間をかけてサンタクルス市から50キロほど離れた「うるま耕地」に入植しました。

入植したはいいものの、１９５４年は大干ばつの年でした。入植後3か月ほど降雨がなく、飲料水に利用していた沼も枯渇し、掘った井戸は塩水のため使えず、リオ・グランデの濁った水を飲む事態となりました。

野菜も育たないため栄養バランスは一気に悪化し栄養失調状態になり、そして10月30日、ついに最初の犠牲者が出ます。その後入植者の半分近くが罹病し犠牲者は15人に達してしまいました。

原因が分からないことに不安を抱いた医師の勧めによってパロメティーヤに転住しましたが、そこも地権者との交渉が不調に終わってしまいます。心配したアメリカ政府の肝いりもあり、パス・エステンソロ大統領の協力によって現在のコロニアオキナワに再転住します。それはボリビアに到着してから2年後のことでした。

この転住によって、新旧の移住者は袂を分かつことになってしまいました。

旧移住者には、良かれと思ってしたことが新移住者を死の地に導いてしまった自責の念が生じ、新移住者には移住地設定への不信感が生じてしまったことはやむを得ないことでした。戦争の犠牲者同士、それも同郷の同胞同

士のこんな悲しい結末を誰が想像できたでしょうか。

ところがこのコロニアオキナワも旱ばつと水害に見舞われます。相異なる天災が同時発生することについては、説明を要します。

長崎県出身者が多いコロニアサンフアンとコロニアオキナワとは１００キロしか離れていませんがこれが降雨量において致命的な差を生じさせます。サンフアンの年間降雨量は１８００ミリですがオキナワは５００～１０００です。オキナワの最大無降水日数は１４０日です。ブラジル側から湿原を渡り湿気を含んだ雨雲がコロニアオキナワには雨を降らさずに通り過ぎてしまうのです。その雨雲がアンデス山脈の冷気に触れて大量の雨を裾野に降らせます。サンフアン移住地の降雨量が多いのはこのためです。すると水かさを増した水がリオ・グランデを下り、コロニアに洪水をもたらします。これが第１コロニアに洪水をもたらし第２・第３コロニアに干ばつを同時に引き起こす原因です。

１９６８年第１コロニアは、リオ・グランデの氾濫で浸水被害、第２と第３のコロニアは大旱ばつに見舞われます。

そんな被害の癒えぬ１９６９年７月18日に私は海外移住事業団サンタクルス支部に着任しました。

翌日19日（日本時間の20日）の新聞でアポロ11号の月面到着が大々的に報じられていましたので、ほぼ同じ時間帯に同じ空の上にいたんだ！という高揚感をもって紙面を眺めました。

私はサンタクルス支部の融資の責任者になりました。当時の移住者の経済状態では、現地金融機関からの借り入れは不可能に近く、貧しい移住者の経済的自立を図るためには日本国の政府機関からの融資が必要不可欠であったからです。

ところで、融資の責任者になるということは、自らが現金を輸送して借り入れをする移住者の一人一人に、直接、現金を手渡すことを意味します。コロニアには銀行など存在しないからです。現金取引のみが信頼できる唯一のものでした。

当然、現金輸送時に襲撃を受ける可能性などを想定しなければならない極めて危険を伴う仕事でした。

支部と事業所との間の連絡は無線通信でやりとりをしていましたが、私の現金持参の出張が筒抜けにならないように乱数表を用意していました。

数字を読み上げて事業所に出発時間を知らせ、予定通りに到着しなかった場合は事業所から偵察隊を出す手はずになっていましたが、そんなものはまったくの気休めでしかありません。

コロニアでは牛の購入などの取引は全て事業団の融資が前提になっていましたから、取引が迫れば、現金が運ばれてくる貸付の実行日時が簡単に、現地社会にも知れわたってしまうからです。

当然のことながらピストルを常に携帯していました。組合事務所の机に札束を積み上げて一人一人招き入れて契約書を取り交わして現金を渡していましたが、私は直ぐに手の届くところに拳銃を置き、ドアの影には同僚にピス

トルを持って隠れていてもらいました。

しかし、融資予算も少なく小規模にならざるを得ず、コロニアオキナワでは度重なる水害と旱ばつもあって、移住地の将来に見切りをつけてブラジル・アルゼンチンへの転住そして日本への帰国者が引きも切らない状態となっていました。

一方、政情も大変なことになっていました。東西冷戦の陰が世界中を覆っていたからです。

南米大陸の「植民地的支配からの脱却と民主化」という大きな潮流に沿いつつも、なんとか共産主義化を食い止めようとしたケネディ米国大統領の下で進められた「進歩のための同盟」構想は、米国の多額の経済援助にもかかわらず思うような成果を上げられずに修正を迫られていました。援助資金の利権を狙っての政争が激化し、それによる政権交代が繰り返されたからです。

キューバ革命の成功、ベトナム戦争での有利な展開に力を得た共産主義陣営の攻勢は勢いを増して、それは１９６６年11月にチェ・ゲバラがウルグアイのビジネスマンに扮装してボリビアに入国してジャングルに潜伏したことで頂点に達します。

南米大陸に共産主義革命の火がつくのを阻止するために、米国は、文民であろうと軍人であろうと反共産主義者であれば支持する方向へと政策転換を図らざるを得なくなります。その結果、この時期の南米大陸は米ソ冷戦の代理戦争的な紛争が、至るところで起きました。その中でもボリビアは特別に政変の頻度が多かったのです。

ベトナム戦争が資本主義陣営と社会主義陣営の対立のマグマが噴出する大噴火口とすれば、ボリビアは常に小爆発を繰り返す小噴火口と言えました。

ソ連の後ろ盾で左翼政権が樹立されると共産党の工作員（オルグ）４～５００人がソ連大使館に入ったとラパス市の日本人から情報が入りました。

その状況を米国と気脈を通じた軍人がクーデターによって左翼政権をひっくり返すという攻めぎ合いが繰り返されました。クーデターや革命を見たければ、ボリビアに3か月滞在すればよいと言われた時代でした。

このような政情は、一見日本人には無縁に思えますが、実はそうではありませんでした。

左翼政権になると大土地所有反対という運動が必ず起こるからです。「ラティフンディオ（大土地所有）反対」を掲げた集団が、日本人移住地にも不法侵入してきました。コロニアオキナワでも数軒の農家がその被害にあっています。

侵入者は「ここは我々の土地だ」「日本人は出て行け」と叫び、マチェテ（小枝払いなどの農作業で使う幅広の山刀）を空に向かって突き上げます。

おそらく、番犬が吠えたのでしょう。

これに学生運動が絡んで「日本人が、我々を犬で追い払った」とラジオで反日感情をあおる放送をしきりに流します。

さらに「日本人移住地の病院は我々

を見殺しにする」などと喧伝し始めました。腹に据えかねてレネモレノ大学の学生運動のアジトに乗り込む決心をしました。日本とボリビアとの移住協定によって日本人医師がボリビア人を診療できないと定められていることを説明し、毒蛇にかまれたとか、交通事故にあったとか、人命に関わる場合は、ちゃんと対応していることを説明しました。

その結果、幸いにして翌日から煽動的な放送はピタリと止まりました。

しかし、不安定な政治情勢は、コロニアの将来を暗いものにしていたので、サンタクルス市日本人会も、各移住地と合同で独立記念日には「日本人移住者はサンタクルスの市民と共に」の横断幕を掲げ行進し、友好の促進に懸命に努めました。

我々が政治と無縁でいられないという一例です。

さて、これまで見てきましたように政情不安と天災による農産物の壊滅的被害は移住者を容赦なく打ちのめしました。

若い娘たちはサンパウロの縫製工場で働いて親元に日銭を送り、親たちは近隣の綿作農場に出向いて綿花の摘み取りで日銭稼ぎの労働をするようになりました。「何をしてもダメだ」という気分が蔓延して、移住地から出て、ブラジルや日本へ転住する人が後を絶たなくなりました。

一方で、日銭稼ぎのために綿花収穫に行った移住者から、綿は旱ばつに強く、生育もよく、繰綿（くりわた）工場も大分儲かっているらしいという朗報が伝わってきました。

宮川清忠農業試験場長の指導の下、コロニアでの綿花の試作が順調であったことから、移住地も事業団もコロニアオキナワの起死回生として綿花事業に取り組むことになりました。

この時、精力的に試作に取り組んでくれた宮川農場長は、ペルーでＪＩＣＡの野菜生産技術センターのプロジェクトリーダーだった時、アルベルト・フジモリ政権に反対するテロリストによって二人の同僚とともに銃殺され殉職されてしまいました。

移住地も事業団もコロニアオキナワを救うには農業の大規模機械化を図ることが可能な綿花事業しかないとオール借金でこれに挑む大博打を決定します。

時の大蔵省（現財務省）が前例のない大型融資を許可してくれたのは、２年後に控えた本土復帰に際して、海外の沖縄県民を困窮のまま放置できないという意識が働いたと考えています。しかし、大蔵省はその融資の実効をあげるために「しかるべき人間を沖縄移住地に出向させること」という付帯条件をつけてきました。

そして私に白羽の矢が立ちました。

コロニアオキナワ農牧総合協同組合ＣＡＩＣＯの設立を指導して、私はＣＡＩＣＯの経営顧問として組合運営の中枢にいて、現在のお金にすると７０億円という大事業に関わることになります。

ところが、いざ融資の実行を受けるという段階になったにもかかわらず、ＣＡＩＣＯに出資金が集まらず、融資を受けるための自己資金も集まりませ

んでした。苦肉の策として、無利子、無担保、無期限の見せかけの出資金を作り出しました。それからの2年間はハラハラドキドキのまさに西部劇のような世界を生きることになりました。その部分は省略させていただきますが、ご関心のある方は本を読んでみてください。

綿花事業は最初の2年間は、大成功でしたが、その後の気象変動で降雨量が多くなり収穫が激減し、またオイルショック後の世界不況により綿花価格が暴落して膨大な借金を残して終わることになります。そして私はコロニアオキナワに膨大な借金を作った張本人として糾弾されることになってしまいました。

ところが、降雨量が増えたことにより適作物となった大豆と小麦等の栽培にいち早く適応できたことにより、汚名が消えてボリビア沖縄県人会の名誉会員にも列せられることになりました。

綿作導入時の思い切った投資による機械化大規模農業で、実際に営農し、組合組織の在り方を学び運営をした体験が今日の繁栄をもたらしたというのです。

農林水産省の２０１４年度「沖縄県農業の概要」によると沖縄県の総農家戸数は約2万戸となっていますから沖縄県の1戸当たりの耕作面積は1・8㌶です。

これに比べてコロニアオキナワは、その約１６０倍から３２０倍と考えてよいのです。

沖縄では、圧倒的1位の栽培作物であるサトウキビとの面積比較をすると、

- 沖縄全県下のサトウキビ作付面積
  1万２７００㌶
- コロニアオキナワ大豆作付面積
  2万８８０４㌶
- コロニアオキナワ小麦作付面積
  1万５０１５㌶

となり、この大豆と小麦だけの栽培面積で、沖縄のサトウキビ畑の3.5倍になります。その他に陸稲・トウモロコシ・サトウキビ・ひまわり等の作付面積で沖縄県のサトウキビの作付面積に匹敵するくらいあると推定されます。牧畜はコロニアオキナワの外に牧場を所有している農家が何軒もあり、正確な数字はつかめませんが牛の頭数も優に2万頭を超えていると言われています。

２０１８年度のＣＡＩＣＯの1組合員に対する貸付限度額が30万ドル、ＣＡＩＣＯの総貸付予算額は1千万ドルです。

綿作を開始する頃の海外移住事業団の農協への融資と３００戸余への個人融資を合わせたサンファンとオキナワ両移住地への貸付総額が10万ドルでしたから比較するのがおこがましいほどの差であり、奇跡的な農業経営規模の拡大とコロニアの発展です。2～3万ドルの借金に各農家が苦しんでいたことが遠い過去のことになっています。

あきらめずに残った10％の人々の壮絶なる努力の結果、コロニアオキナワはめざましい変貌を遂げました。それによって、コロニアオキナワは、これまでの「沖縄県のお荷物」的な存在から「沖縄県の宝」へと変わりました。

ＳＦ小説の『日本沈没』ではないが、もし将来、戦争や大地震、大隕石の落下等により沖縄本島の危機が予測されたりしたときには、沖縄県は、チャーター便で子どもたちをコロニアオキナワに緊急疎開させることも視野に入れられるのです。ボリビアには、沖縄本島の面積の半分に匹敵する県民のコミュニティーがあります。

宿泊先の選定や食糧の確保はもとより教育の継続にもまったく困らないのです。

空想的過ぎると言ってしまえばそれまでですが、そんなことが想像できる県は、沖縄県をおいては、他にどこにもありません。

その一方で、コロニアを去っていった人は、なんと入植者の90％にもおよびます。

私は、日本に帰ってきた人たちとも今に至るも交流を保っています。皆さん苦労はされたが、しっかりと生きています。そこには、ボリビアでの農業開拓はあきらめたが、人生をあきらめたわけではない人たちのたくましさがあります。

おつきあいを通じて、私の方が勇気づけられることの方が圧倒的に多いのです。

以上ボリビアにおける沖縄県民の開拓の歴史を辿ってきましたが、貧困の故に、そしてまた戦争によって家族を失い、さらに自分の土地を接収されて、もがき苦しんだ人々が「人間として生きる権利」を求め、夢を託して海を渡った歴史的事実はしっかりと受け止めておかなければなりません。

そして、同じような境遇の故に、今まさに、海外から日本にやってくる人々が増えています。

我々は、その人々に「人間として生きる権利」を享受できるように配慮していきたいものです。他国で見られるような移民の暴動などという事態は絶対に起こしてはならないと思います。

「国内における国際協力」の視点で多文化・多言語の共生社会の構築を目指すためには、日本のムラ社会の固有のあり方を含めて、日本人自身が改めていかなければならないこともたくさんあると思っています。

この分野での官民挙げての幅広い相互交流の活発化を期待しております。

（２０２３年７月６日・公開講演会）

筆者略歴（わたなべ・ひでき）

１９４１年長野県佐久市に生まれる。長野県立野沢北高校・中央大学法学部卒業。旧海外移住事業団ボリビア国サンタクルス支部勤務、国際協力機構（ＪＩＣＡ）、日ボ合弁企業社長等を経て、ビル管理会社を設立して独立。現在、代々木西脇ビルグループ会長、一般社団法人日本ボリビア協会相談役。

２０１９年から２０２２年まで『琉球新報』に「ボリビア開拓秘史―コロニアオキナワと共に」を60回にわたり連載。

２０２２年５月『ボリビア開拓記外伝―コロニアオキナワ　疫病・災害・差別を生き抜いた人々』（琉球新報社）を出版。

満洲唱歌に見る満洲の原風景
―消えゆく唱歌を惜しんで

藤川琢馬（会員）

1 はじめに

「まちぼうけ」や「ペチカ」は満洲唱歌だった、という書き出しで始まる喜多由浩著『満州唱歌よ、もう一度』が出版されたのはちょうど20年前であった。終戦時、在満日本人学校の児童だった人たちは当時60歳代で、彼らは活発な同窓会活動を通じて満洲の思い出を語った。年に一度の集まりで、懐かしい自校の校歌に声を合わせ、顔を見合わせながら満洲唱歌を歌うこの場は、大きな喜びであった。それは彼らの文集作りと同様、唱歌に付随するそれぞれの思い出や暮らしてきた証しが、また時代とところを共有した仲間意識など、歌が作り出すことのできる共通の思いと感情が、歌うことによって確認し合えたからである。

わたし自身は引揚げまで7年間の在満で、しかも敗戦混乱時の就学では、唱歌の教科などあったかどうかの記憶もなく、満洲の同窓会もない。しかし、諸先輩方が愛唱するいくつもの満洲唱歌を歌っているうちに、いつしか満洲唱歌に愛着を覚えるようになった。唱歌を通じて、自らの生まれ育ったところに触れたいという思いがあったのだろう。

北原白秋、山田耕筰による先の2曲は、大正13（1924）年に発行された在満日本人児童のための『満洲唱歌集　尋常科第一・二学年用』に収載された唱歌である。すなわち満洲唱歌は、大正末期に児童の教科に導入され、以来、終戦に至るまで児童たちに歌い継がれ、親しまれてきた。これら2曲はその後の教科書改訂で姿を消したが、知らない人はいない日本の童謡に生まれ変わり、代わりに在満児童にはより満洲の風土に根差した唱歌が与えられ、児童たちは愛唱した。

喜多著はそのタイトルにあるように、「満洲唱歌を忘却の彼方へと追いやっ

てはならない…さまざまな人たちの思いが込められた歌の数々を、次代に伝えたい」と願ったものだった。しかし発行されて20年、かつての在満児童は80歳代になるとともに次第にその数を失い、同窓会や満洲関係団体の解散も相次ぎ、今や満洲唱歌を歌う機会も場もほとんどなくなってしまった。喜多の願いも空しく、人々と関係する唱歌が消えゆき、唱歌とともにある思い出が消え去り、満洲唱歌は、楽譜や音源などの記録媒体に保存されるだけの存在になってしまった。いかんともしがたい時の流れに抗うことはできないが、わたしは、わずかでも満洲唱歌の記憶をとどめておきたいと思っている。

満洲について、文字、写真、画集、絵はがきなどを通じて知るのと同じように、満洲唱歌を通じて知るところ感じるところがあるに違いない。あるいは、唱歌だからこそ感じられる面があるのではなかろうか。また、満洲唱歌に表現されているふるさとの風景は、日本人の在満児童だけのものではない。満洲の児童にとってもその風景は同じく存在した。

多くの満洲唱歌には、その歌詞に満洲特有の風物が表現され、満洲色を主張するが故に満洲っ子が親しみ、のちのちまで愛唱された。彼らが最も愛唱した唱歌「わたしたち」には、北風、雪、リンク、スケートあそびなど満洲ならではの歌詞があるだけでなく、直接的な表現〈まんしうそだちの　わたしたち〉があって、これでは学校の校歌と同然、満洲っ子だけの歌である。「たかあしをどり」も「娘々祭（ニャンニャンまつり）」も現地の習俗が題材で、内地の子どもには馴染むことができない。満洲唱歌には、歌詞だけでなくメロディーやリズムにも土地の匂いがある、と前掲書に記されているが、この点についても後ほど考察してみたい。

2　満洲唱歌に表れる風物

2・1　赤い夕日と広野のコウリャン

満洲唱歌に描かれた満洲の風物は、風景であれば確かに存在した風景であった。しかし今、現実の世界では存在しなくなっているかもしれない。たとえば赤い夕日と地平線の果てまで広がるコウリャン畑は、最も強い印象を与える満洲の景色だが、その景色は今でもあるだろうか。近年その表現を目や耳にすることがないように思える。夕日の色や大きさ・位置は変わらなくても、コウリャン畑には別の作物が栽培され、あるいは土地が開発されて街となり、ビルが建てられ、地平線はなくなっていないか。実在した風景は今や原風景になってはいないか。

そのようなことを思っていたときある著書の「あとがき」を目にした。その末尾に、「高粱畑が切れる地平線をゆらゆら揺れながら沈む雄大な北満の夕日を見つめつつ　―綏芬河（すいふんが）に向け北行する寝台車の車窓から―　２００８年初秋」と記されていた（小林英夫『〈満洲〉の歴史』講談社）。これは15年前の著書で、そのときはコウリャン畑と夕日の景色は確かに存在していた。しかし現在人々の暮らしの中で、コウリャンへの依存度ははるかに低下している。それは、中国の経済成長ととも

に人口1人当たりコウリャンの生産量や食糧用途の減少を見れば明らかである。

赤い夕日のこの風景がいかに印象的であったか、藤原作弥氏は語る。「…8時近くになって急に日が暮れはじめた。西の高粱畑は地平線まで続いていた。…平原を真赤に染めて大きな太陽が、ぐんぐん沈んでいく。高粱畑はあかね色に燃えている。僕たちは雷に打たれ、金縛りにあったように動くことができず、落日に見とれている。子供心にさえ、跪きたくなる荘厳な光景だった。僕はいまでも満洲唱歌集「夕日」を暗誦んじている（『満州、少国民の戦記』新潮社）。

4年生向けの満洲唱歌「赤い夕日」である。

〈一　遠くの低い山々を　皆一様に
赤くして　あれよ　夕日は今沈む
二　はてしも知れぬ　高粱の　畑一面
を　赤くして　あれよ　夕日は今沈む
三　家の瓦も　木の枝も　もえたつ様
に赤くして　あれよ　夕日は今沈む〉

岩見隆夫著『敗戦　満州追想』（原書房）には著者の実姉による挿絵があり、当時車窓から見た夕日とコウリャン畑の景色が描かれている。畑の手前には、農夫が荷車をひくロバに鞭をあてていて、「大連から北に向って一人で汽車に乗ったとき、見わたす限りのコーリャン畑に、大きな夕日が沈む光景をうっとりと眺めました」との説明がある。赤い夕日は満洲関係著書のタイトルや表紙のデザインにいく度も利用され、〝アカシアの大連〟と同じようにシンボリックである。

満洲唱歌の1曲1曲に描かれている夕日やコウリャン畑の景色を見てみたい。以下9曲ある（曲目に添える数字は唱歌の対象学年を表わす）。

「アキ1」〈ニシハユフヤケ　アカイクモ　ヒガシハマルイ　オツキサマカオリャンカッテ　ヒロイナア　ドッチヲミテモ　ヒロイナア〉

「こうりゃんさらさら2」〈一　あかいゆう日の　あまあがり　つゆがきらきら　ひかってる　つかひのかへり　ただひとり　こうりゃんさらさら　ゆれるみち〉

「夕やけ2」〈一　ゆふやけこやけはたのはたの　こうりゃんは　なんとせが　たかいな　あたまがこげるぞ〉

「ネコヤナギ2」〈二…ユフヒガハタケヘ　オチルノニ　オヤネコカアサン　マダコナイ〉

「子羊4」〈一　…赤い夕日が　沈むのに　まだまだ子羊　帰らない…〉

「野っぱら4」〈三　夕日あかあか広野にしづみ　夜みちどこまで　歩いても歩いても　野っぱらばかりが　つゞいてる〉

「駱駝の鈴5」〈一　風にさらさら高粱（コウリャン）ゆれる　千里一目の　広野（ひろの）の日暮れ　鈴が響くよ　駱駝が来るよ喇嘛（ラマ）の古塔の茜空（あかねぞら）〉

「月5」〈二　一　むらのこる　雨雲に夕日の色の　消えるころ　高粱の葉に露みえて　涼しくのぼる　夏の月〉

「日の出の歌6」〈二　彩雲（あやぐも）たなびく野もせのあけぼの　眼もはるかなる高粱の　はてなきかなた　しづしづ昇る…〉

これらから示される風景は、夕日が雲を赤く染め、畑や広野にゆっくり沈

んでゆき、背高く伸びたコウリャンが風にさらさらなびいている景色である。夕日が沈んだ後は夏の月が昇り、やがて東の果てに日の出を迎える。変わらず繰り返される大自然の営みが感じられ、荘厳ですらある。

2・2 やなぎのわたが飛ぶ風景

満洲の原風景として強い印象を与える夕日とコウリャンの影に隠れて目立たなかったが、満洲唱歌には柳や楡をうたったものが多い。やなぎはヤナギ、柳、楊、楊柳（やなぎ）と表記され、ネコヤナギ、どろやなぎ、絲やなぎが出てきて、やなぎ風なる形容表現を生んでいる。やなぎは庭木や街路樹、川辺の風景の中に取り込まれ、美しい春の若葉を迎えると、熟した実から綿毛をもった種子が飛び、ふわふわ空中を舞う。柳絮（りゅうじょ）、やなぎのわた――なんと優しい響きであろう。わたしには当時の自然環境はもとより、現在の情景に触れる機会もないが、80年、90年前と同じように現在でも、やなぎのわたは春になれば目にする風物詩に違いない。先輩方にとって、わたが舞って感じる季節の到来には、何らかの心象風景があるかもしれない。やなぎのわたは野外だけでなく、部屋の中にまで飛んできた。やなぎの出現頻度は唱歌の13％に及び、夕日より多かった。

「やなぎのわた2」〈一　あをぞらとぶよ　ふわふわわたが　やなぎのわたが　ひかってひかって　とぶよ　二　まどからはいる　ふわふわわたが　やなぎのわたが　つづいてつづいて　はいる　三　つくゑにのるよ　ふわふわわたが　やなぎのわたが　こっそりこっそり　のるよ　四　らうかにたまる　ふわふわわたが　やなぎのわたが　あんなにあんなに　たまる〉

「湯崗温泉で3」〈一　此処（ここ）は春風湯崗（たうかう）子子　やなぎなみ木が　さわさわととびますとびます　わたのむれ　温泉客も　見とれます〉

「やなぎの春5」〈やなぎのわたの飛ぶころは　きいろいほこりもかすみます　乗れ乗れ　小さな驢馬の上　夕日の古塔を見に出よか　奉天北稜・新市街　飛べ飛べ　やなぎの毛のわたよ　ふさつき帽子をうちふろか　やなぎのわたの飛ぶころは　日本のお祭り思い出す〉

やなぎのわたが舞うころ、東北の空には黄砂も舞う。きいろなそらや黄色いほこりと表現されていて、これもまた満洲の風物詩であろう。満洲では楡の木もよく見られた。奉天の2校の同窓会名に楡の字が宛てられていることをわたしは知っている。

2・3 ロバとともにある農村の光景

満洲唱歌にはロバ、羊、駱駝、豚、ラバ、牛、馬、犬、猫、兎などの動物が表現されている。それらの中で最も多いのがロバで、満洲の風景画にも多く登場する。ロバは従順で、朝から晩まで農民とともに働く。

ウサギウマはロバの異名である。いつも首に鈴をぶら下げていて、夜明けとともにコロリンカラリンと鈴が鳴り、畑や街を行くロバの鈴の音は美しく耳に響く。のどかで穏やかな情景で、どこか懐かしい。

「ウサギウマ1」〈一　コロリンカラ

リン　コロリンカラリン　ウサギウマ
オスズガナルトキ　ヨガアケル　ニー
コロリンカラリン　コロリンカラリン
ウサギウマ　アカツチミチガ　ヒニヒ
カル　三　コロリンカラリン　コロリ
ンカラリン　ウサギウマ　オミミヲフ
リフリ　ヒガクレル〉

「こうりゃんさらさら2」〈二　あを
いおそらに　ながれぐも　ろばがゆく
のか　すずがなる　日ぐれのあぜみち
かぜのみち　こうりゃんさらさら　さ
びしいな〉

「鈴の音6」〈一　床しきものよ　ろ
ばの鈴　うれしきものよ　其のひゞき
わけても夏の　夕まぐれ　月まつころ
に　汝(なれ)をきく　さやけきものよ　ろば
の鈴〉

働き者のロバは粉屋で目隠しをされて粉をひく。

「カラストロバ1」〈一　カラスガコ
ナヤニ　コナカヒニ　トントンカドノ
ト　タタキマス　コナヤノロバサン
メカクシデ　イシウスヒキヒキ　コナ
ツクリ　ニ　ロバサン　ロバサン　コ
ナハマダ　ゴハンノシタクガ　オクレ
マス　コナハマダマダ　ヒマガイル
セカズトシバラク　マットクレ〉

「こな雪3」〈一　こな雪さらさら
こな雪さらさら　里のこなやは日が暮
れて　ろばの目かくしはづすころ　こ
な雪さらさら　こな雪さらさら〉

ロバとともに過ごす農民と農村の風景は今あるだろうか。ロバの荷車は車に居場所を奪われていないだろうか。

2・4　日本にはない満洲の習俗や音の風景

除夜から新年にかけて、華々しく爆竹を鳴らす習慣は西欧にもあるが、日本にはない。魔除けのこの習慣は、青竹を焼いて爆発音を立て、鬼を追い払ったことに始まるという。在満の児童たちに爆竹の音の記憶はあるだろうか。満洲唱歌には、パチパチ撥ねる音に驚いて小鬼が逃げまわる様子が、面白おかしく描かれている。

「バクチク1」〈一　バクチク　パチ
パチパチパチ　コオニガニゲル　アッ
チノハウヘ　ニゲル　コッチノハウヘ
ニゲル　ニ　バクチク　パチパチパチ
パチ　コオニガニゲル　ビックリシテ
ニゲル　アワテテ　ニゲル〉

毎年旧暦4月半ば、道教の娘々廟で行われるお祭りは娘々祭、春を告げるうれしいお祭りで、子ども、娘たち、大人にも楽しみにされた。満洲では大石橋近郊にある廟が最も有名で、娘々祭には全満から数十万人もの人がやってきたという。店々が立ち、笛やどらがはやし立て、花火も打ち上げられる。娘々祭には、「高脚踊り」が繰り出された。数十センチの高下駄を履き、派手に隈取りされた踊り手たちがどらや太鼓で囃され、高下駄を上手に操って踊る。その賑わいや華やかさは観衆に大人気であったという。高脚踊りは満洲だけでなく、台湾、中国大陸全域で行われた習俗である。

「娘々祭3」〈一　娘々祭だ　うらら
かだ　娘々祭だ　お参りだ　赤い晴着
に日がさして　人ぎょうも通るよ　し
ばゐもあるよ　をどりもあるよ　ニ　娘々
祭だ　人の波　娘々祭だ　馬車の海
わか葉　そよ風　やなぎ風　ふえも聞
える　どらも聞える　花火もあがる〉

「たかあしをどり2」〈一　ピーチャンピーチャン　チャンチャラチャンピーチャンピーチャン　チャンチャラチャン　たかあしをどりは　チャンチャラチャンチャラ　チャン　おこったかほして　チャンチャラチャンチャラチャン　にこにこがほのも　チャンチャラチャンチャラ　チャン〉

ピーチャンピーチャン　チャンチャラチャンは、高脚踊りの傍らで楽隊が騒々しい音を立てている笛やどらの音で、日本では聞くことができない。前述の、ロバにつけられた鈴がコロリンカラリンと鳴る音も、日本では聞くことができない。娘々祭も高脚踊りも内地の児童には馴染むことのない、満洲の原風景である。

2・5　聞こえてくる異国語と現地での交わり

満洲には日、朝、満、漢のほか蒙古人、回教徒、ロシア人がいた。民族別の人口は地方地方により偏在していたが、いずれにしても資料によれば、1938年には総人口の93％が満漢族で、そのうち99％以上が漢族だとされている。児童たちの日常でも中国語を耳にすることが多かったであろう、満洲唱歌の歌詞の中にも中国語が出てくる。

「カゾヘマス2」〈一　ツユノイチゴヲ　カゾヘマス　リーサンニコニコ　カゾヘマス　一二三四（イーアルサンスー）カゾヘマス　ココハハタケヨ　アサノカゼ　ニ　カゴノイチゴヲ　カゾヘマス　ワタシモイッショニ　カゾヘマス　一二三四（ひいふうみいよう）カゾヘマス　ナクヨクワッコウ　モヤノナカ〉

早朝の畑の中、収穫したかごのイチゴを李さんがニコニコ顔でイーアルサンスーと数え、わたしはひいふうみいようとお手伝いする。李さんは優しく親切な隣人だったろう、わたしにイーアルサンスーと教えたに違いない…李さんと児童が微笑んでいる場面が浮かんでくる。

「洗衣裳4」〈一　かげらふゆらゆら　好天気白（ハオテンチ）いかはらの　あちこちで　きぬたとんとん　洗衣裳（シーイーシャン）　岸じゃ小豚が　ねむってる　二　小川さらさら　好天気　赤いクーヅの　大姑娘（タークーニャン）　きぬたとんとん　洗衣裳　空にゃお日様てらしてる〉

うららかな春の日、揺らめく陽炎、小豚も眠っているのどかな川原、洗濯日和である。赤いズボンの娘さんも精を出し、あちこちで衣類をたたいて洗っている。満洲の人たちの生活が描かれ、中国語がちりばめられている。日本の子どもたちにとって彼らの日常に親しみを感じさせた歌だ。

「ロシャパン1」〈ロシャノヲヂサン　パンウリサン　「ロシャパン　ロシャパン」　パンウリサン　ユキノフリソナ　ソラモヤウ　「ロシャパン　ロシャパン」　パンウリサン　シャタクウラミチ　ヒグレドキ〉

満鉄社宅の裏道をロシア人のパン売りさんが「ロシャパン、ロシャパン」と物売りの声をあげゆっくり通ってゆく。寒くうら寂しい歌詞の情景から白系ロシア人のことなど思ったりするが、それは大人の感傷であろう、児童たちにとってはおなかのすく夕方近くである。物売りの声のイントネーションで、ロシアはロシャになる。パン売りさんを通じて子どもたちはロシア人に親し

みをもっただろう。

3 日本の唱歌に見る原風景と比べる

満洲唱歌に見られる満洲の原風景は、日本の風景とどう違うのか、わたしは日本の唱歌について検証してみた。日本の唱歌は、明治末から昭和初期にかけて編纂された百数十曲よりなる『新訂 尋常小学唱歌』を選んだ。これには、紅葉、村祭り、村の鍛冶屋、冬景色、朧月夜、故郷など、よく知られた懐かしい唱歌がいっぱい詰まっている。

ここで詳述は避けるが、全体のおよそ4分の1にわが国特有の風物が描かれていた。すなわち、①農村の畑や田んぼの原風景であり、農作業や農家の生活が表現され、②それぞれが詩になる日本の四季とその趣が描かれ、とくにのどかな春の情景や秋の紅葉の美しさを愛で、③案山子、村祭、雛祭、折紙、運動会など日本の習俗・習慣に基づく風物があり、④四方海に囲まれているわが国には海の歌も見出された。これらは日ごろ意識することなく、空気のごとく慣れ親しんでいる風物である。

主観的ではあるが日満の唱歌を比較すると、日本の唱歌の抒情性は箱庭や額縁の中の絵に見るように整った、しっとりした情景であった。それに対して満洲唱歌にはまず広さ、大きさが感じられ、乾いていて大雑把であっさりとしていた。日満の風土が生んだそれぞれの抒情性の違いである。

しかし日本の唱歌の大きな柱は徳育教育と軍国教育にある。歴史が題材の唱歌であっても教訓的、というより教訓そのもので（たとえば「二宮金次郎」）、軍国的唱歌と合わせるとこれらは全唱歌のほぼ3分の1に達する。唱歌は児童たちの情操教育が目的であるのと同時に、国力増進・国威発揚を国是として、そのための教育に利用された。文部省唱歌の成り立ちそのものである。

満洲唱歌の一部にも、兵隊さんや国家を意識させる曲はあり、とくに高学年向けには祖国日本との絆を忘れさせない表現がある。それは、〈日満をむすぶ日本の旅客機だ〉と日本を讃え、〈日本のお祭りを思い出させ〉たり〈大君（おおきみ）いますわが故国（ふるさと）〉というような歌詞で、満洲唱歌の立場に疑問を感じさせる部分がある。満洲国と日本の関係は、昭和12年盧溝橋事件勃発とその後の日中戦争の長期化、さらに日米開戦に至る中で、共同防衛の立場にある満洲国の内地化が進められ、満洲唱歌の内地同化も進められた。しかし、満洲の児童たちには内地化した唱歌には親しめなかったに違いない。戦後になって現在になって、満洲のかつての児童たちが歌いたい唱歌は、思い出が込められた本来の満洲唱歌である。

4 満洲唱歌の曲譜に見る満洲色

喜多著には満洲唱歌の特徴について次の言及がある。「メロディーやリズムを見ても、日本の唱歌とはかなり違う。土地の音楽の要素をより多く、取り入れているのだ」。また、「そのころ、園山は精力的に満洲各地を回り、現地の教師の意見を聞いたり、土地のメロ

ディーの採譜を行っていた。それを参考にしながら、数多くの満洲唱歌を作曲したのである」。

〝満洲唱歌の父〟といわれる園山民平（1887～1955）は、大正11（1922）年満洲唱歌集編集部の発足とともに内地から招かれた作曲家である。園山らが追究した〝土地の音楽〟とは何か。曲譜についての論議は紙上では行いにくいが、あえてこの満洲色について考察を加えてみたい。

歌謡曲の世界では中華メロディーなるものがあり、たとえば「支那の夜」〈支那の夜　支那の夜よ　港のあかり　むらさきの夜に…〉や「蘇州夜曲」〈君がみ胸に　抱かれて聞くは　夢の船唄恋の唄…〉のメロディーを挙げることができる。これらの曲は日本人による作曲なのに音の運び、リズム、装飾音符、ポルタメントの使用などによって、いかにも中華色を感じさせ、作曲者の腕に感心させられる。しかしこの中華色は明らかに上海的で、満洲を想起させない。満洲の音楽は大陸と異なり、満洲特有の曲調があるとわたしは考えている。

満洲音楽の特徴を探していたとき、大連翻訳職業学校日本語学院2010年卒業論文（翻訳文）を見つけ、ここに中国民間音楽の特徴が論じられていた。「北方の民間音楽は7音を使うことが多く、南方は5音が多い。北方は音程が比較的大きくメロディーの運動が大きい。北方はメロディーの角が多く、南方は曲がりくねる。北方は叙事性に富む」という。

わたしが知っている満洲の歌に「満洲建国歌」（高津敏・園山民平・村岡楽童作曲）〈天地内有了（ティエンティーネイユウリャオ）新満洲（シンマンチョウ）…〉があり、高齢の日本人には知っておられる方が多いだろう。おおらか、のどか、ゆったり、こせこせしない、広い、力まない、しかしどこか抜けている、締まりがない、というような感じがあり、メロディー的には音の跳躍が多く、♪―ドードーラドラドミソ―ラーソーレードー―（傍線は十六分音符。傍点はオクターブ上の音）の部分など満洲独特のにおいを感じさせる。「満洲建国歌」は前記のコメントと合致するところが多く、この記述は満洲唱歌の特徴を知るうえで大きなヒントになった。

そこで満洲唱歌の全曲について調べたところ、3割近くの曲に満洲色を感じ、そのうちの8割がたに音の跳躍が多いという特徴が認められた。とくに次の3曲は、曲譜と同時に歌詞にもまた、満洲色が豊かであった。

「がん2」〈一　がんがいく　がんがいく　ひろののはての　きいろなそらを　かぎになり　さをになり　一一がんがいく　がんがいく　きいろなそらを　とほくのくにへ　さをになり　かぎになり〉

「小さな駅3」〈小さな駅に　さいている　うすむらさきの　ライラック　赤い服着た　しなの子が　にこにこ顔で　ながめてる　うすむらさきよ　さやうなら　にこにこ顔よ　さやうなら〉

「洗衣裳4」〈既出〉

音の跳躍以外に八分音符の連なるメロディーなど、満洲色に関わると思われる特徴も見出されるが、主観的なことでもあり詳述は避ける。いずれにせよ満洲唱歌に土地の音楽を感じさせる

要因には、これら曲譜上の特徴も加わっていよう。

なお日満の唱歌の曲譜上で、日本の唱歌には馴染みが深いピョンコ節が満洲唱歌にはなかったことは大きな違いである。明治以来の歴史と伝統を引きずっている日本の唱歌に対して、満洲唱歌にはそれがないことによる（ピョンコ節とは、たとえば「鉄道唱歌」〈汽笛一声新橋を〉に見られる跳びはねるような繰り返しのリズム）。

おわりに

かつて満洲に居住した多くの人が、あの頃はみんな満洲の人たちとも仲よく暮らしていたという。もちろん同時に、土地を収奪された人だけでなく、満洲の人々が外来者に対して心を開かなかった例はたくさんあろう。一方で、のちに多くの中国残留孤児を生むことになるその事実は、多くの場合、気の毒な日本人避難民を助けようとした、満洲の人たちの人道による。国家と違って個人は、家族愛から隣人愛へと心のつながりを広げる。

満洲唱歌の中にあるもの、それは満洲の大地、赤い夕日に輝く広いコウリャン畑、柳がそよぎロバがのんびり歩く光景、満洲の習俗や異国情緒、厳しい寒さのなか白い息を吐いてスケートに興じる子どもたち、一二三四（イーアルサンスー）と聞こえてくる李（リー）さんの声、である。満洲唱歌が在満児童用に作られたとしても、唱歌に描かれるこれらの情景は、日本人にも満洲人にも共通の、残しておきたい原風景である。児童たちの歌声には、国家も国家権力もなかった。満洲唱歌は消えていっても、満洲の原風景は忘れ去りたくない。

資料

（1）本稿で対象とした満洲唱歌は復刻版『満洲小学唱歌集』謙光社（昭和48年）収載、小学校1～6年用の69曲で、高等小学校向けその他は除外した。

（2）喜多由浩著『満州唱歌よ、もう一度』扶桑社（２００３年）

復刻版『満洲小学唱歌集』

陶々俳壇（ようよう）

陶陶句会結果
2023年5月

兼題「手」

馬場由紀子

横丁の祠の守や桐の花　松島二三四
◎正子　人気のない祠に桐の花がひっそりと咲いていて清々しい。
○紅杓
○由紀子　桐の花の存在感は確かなものです。気品と神聖を感じます。

手詰まりはしばし忘れて若葉風　〃
○正子　気分をぴったりと言い当てています。この季節、美味しい空気で一服。
○紅杓
○明良　盤面での手詰まりか、仕事での手詰まりか判断できませんが、そよ風に吹かれながら自然体を取り戻そうとの風情が醸し出され感動します。
○由紀子　甘やかな風に日常の憂さは押しやられる。確かにこの頃の風にはそのような力を感じます。「手詰まりはしばし忘れん」と軽く切ってもよさそう。

ぴかぴかのランドセル歩く春の風　橋本紅杓
◎正堂　春風の中を一年生が黒く光る革のカバンを背負い登校する様子は遠い吾れの幼き日を思い出す。
○由紀子　新一年生は、まるでランドセルが歩いているようです。

若葉風くれなゐ光るカナメモチ　〃
○正子　ご近所の生垣が見頃です。
○由紀子　花ではなく葉がこれほどまでに紅いとは。カナメモチの明るさに毎年圧倒される思いです。

オガタマの咲きつ匂ひつ散りもして　日野正子
◎明良　咲き、匂い、散りと流れるような句でありながら、散るが儚さを語っています。

姫つつじ千両役者の見得を切り　〃
○正堂
○二三四　小ぶりのツツジもそれぞれきりりとした美しさがある景を、ユニークな比喩で表現されました。
○由紀子　たまたま今日姫つつじを見かけました。枝振りが、見得を切る役者の腕を思わせるものがありました。

車窓よりハンカチを振る別れかな　大内善一
◎由紀子　今時、別れにハンカチを振るような上品な方がいるのだろうか。そのハンカチは、タオル地ではなく、日本手ぬぐいでもない、ガーゼじゃもそもそしちゃいます。やっぱりレースのハンカチかなぁ。昔懐かしい景です。

○正堂
亀鳴くや亀戸天神橋の下　〃
◎紅杓　季語「亀鳴くや」と「亀戸天神」で「亀」が繰り返されているのが気になるが「亀が多くいるが鳴き声は聞こえない」といういささか俳諧味がある句だ。そもそもなぜ季語として認められているのであろうか。藤原為家の和歌「川越のをちの田中の夕闇に何ぞときけば亀のなくなり」なる和歌が鎌倉後期1310年頃の和歌集『夫木和歌抄』に収められているからという。また、春の季語と言われるが、春の陽気に誘われて冬眠から覚めた亀が日に向いているのどかな様子が春っぽいからという。俳諧味ある句として以下の句が目に留まった。「つぎの世は亀よりも蛇鳴かせたし」「亀鳴くや体のなかのくらがりに」桂信子
○明良　和歌で知った「亀鳴く」ですが、下町には風情のあるところが多く羨ましい句です。
●由紀子　昔、亀戸天神の裏に遊郭があったそうです。それを思うと「亀鳴く」の季語が深い意味を持ってきますね。

ホーホケキョ今日の声音はいと優し　瀬﨑明良
○善一
○正堂
○紅杓

鶯が今日も窓辺を訪ね来ぬ　〃
○正堂
●由紀子　「開け放つ窓に老鶯近うする」としても。

手を挙げて遠のく友に別れ告げ　伊藤正堂
○善一
○明良　夕焼けが見えるような句で悲しい別れであってもほのぼのとします。
●由紀子　季語があった方が良い。

手紙書く巻紙ひろげ筆に墨　〃
●明良　むかしむかしの風景と思っていました。

手の皺に祖母に似てくる穀雨かな　馬場由紀子
◎善一　二十四節気の一つで新暦の四月二十日頃に降る雨を穀雨と言う。その時期の掌の皺は、年を取るにつけて祖母様の掌に似てきたなあと感慨深く思えてしまうこの頃である。
○正堂
○二三四　春の農作業が本格的に始まる頃。作者も家庭菜園に勤しんでいるのでしょうか。力強く道具を使う手をふと見れば、働き者だった祖母の手に似ている。祖母との思い出も、自分の勤勉さも愛おしい。
○紅杓
○明良　歌人の我々も風情が共感をもつ年齢になりましたか。我々は俳人ですね。
●由紀子

図書館に沈めば薔薇の風がふと　〃
◎二三四　「沈む」という表現と、「ふと」の措辞がすばらしい。
○正子　ひんやりとして静かな図書館。風が運んでくるかすかなバラの香に気付いた。

陶々俳壇（ようよう）

陶陶句会結果
2023年6月

兼題　「犬」　　**馬場由紀子**

幹断ちし椎の古木に若葉湧く　　日野正子

◎紅杓　椎は強健で樹勢が強く放任すると大木になるため幹を伐るなどの強剪定を行うが、幹から新枝が芽吹いて若葉をつける。しかし、椎が活動している期間の剪定は樹木を弱めるため木が活動を始める前の4月頃や、10月頃の寒くなって活動が鈍る時期に剪定を行うのが良いとされる。春先の強い剪定で樹形を整え、弱い剪定を秋口に行い日照をよくすることで害虫に強い樹木へと育てたい。

○三三四　ひこばえですね。古い命が新しい命へと繋がれていくのですね。

○正堂

さえずりに汝が名問ひたし若葉風　　〃

◎明良　今まで囀りだけを聴いていたのですが、先日、やっと鶯の姿をとらえました。いろんな鳥の囀りを落ち着いて聴ける老後の幸せが句に満ちています。

門前の宿高き樹林や仏法僧　　橋本紅杓

◎善一　宿の門前に、何代かつづいている欅の樹木が立派に育っている。そこにその欅を目指して仏法僧が飛来し、なつかしい声で鳴いてくれる。

○正子

紫陽花の毬や日に日に青を増す　　〃

○善一　紫陽花の花は毬のように円く、その咲くさまは日に日に青さを増してゆく、よく観察している。

○明良　花に変わる前の紫陽花も他の花にない風情があります。日に日に青を増すの表現が巧みだと感じます。

制服の白線眩し今朝の夏　　松島二三四

◎田紀子　更衣で夏の制服になったのだろう。「白線」に象徴される若さが眩しい。

○紅杓　日差しの輝きと女生徒の輝き。

目の前は八重歯こぼれる恋ボート　　〃

◎正堂　千鳥ヶ淵のお濠で浮かぶ男女相のりのボートを花見の頃よく見かけるが、彼女の微笑むたびに可愛い八重歯がのぞいてみえる様の一句なり。

○明良　一度も経験のない身ですが、青春の夢を思い出しました。

玉葱を吊すたびごと二三落つ　　伊藤正堂

○田紀子　慣れていらっしゃらないようだ。素人菜園の面白さ。

上出来の玉葱配る両隣　　〃

○紅杓

涸れ河をはためき泳ぐ鯉のぼり　　瀬﨑明良

○二三四　家で上げなくなった鯉のぼりを集めて河原などに渡して泳がせる風景をよく見かけますが、そのような景を詠んだと解釈しました。鯉のぼりも何十匹となると勇壮です。

○正堂

○善一　日頃とうとうと流れている河も日照り続きで涸れてしまいましたが、近くに立てられた鯉のぼりが悠々とはためいていた。いい風景だ。

○田紀子　この時期よく見かける明るく楽しい景。「川涸れ」は冬の季語。この季語には山の雪や寒々とした季感を含んでいるので「鯉のぼり」と共に使うのは読み手に違和感を生じさせてしまうおそれも。夏場に水がないのは雨が降らないとかダムで水量を調整していると考えられる。ここは、単に水がないという表現で良いのではないだろうか。「鯉のぼり水無川を泳ぎけり」

オートバイ宮ヶ瀬の風恋しきか　　〃

○三三四　作者はこのオートバイには今は乗っておらず、共に風を切って宮ケ瀬をツーリングした日々を懐かしく思い起こしているのでしょう。無季ですが、初夏の風を受けての追憶、と読みました。

里帰り父の絽羽織いただきぬ　　大内善一

○明良　代替わりと羽織の引き継ぎが頂きぬで締まっています。

○田紀子　父に認めてもらったという誇らしさと嬉しさが伝わってくる。

白南風や祖父の墓標の文字うすれ　　〃

○三三四　かなり古いお墓ということでしょうか。梅雨明けの早朝、久しぶりの墓参へ。薄くなった文字を撫でつつ、祖父との思い出に耽る姿が浮かびます。

○田紀子　祖父の墓標の文字が薄れるほど年月が過ぎたということは作者も年を重ねられたということか。

蒸し暑き夜の老犬に容赦なし　　馬場由紀子

◎正子　苦しそうな老犬を気遣う作者の心が伝わってきます。

○三三四　近年寝苦しい夜が増えました。老犬は作者でもあるのでしょうか。

髪洗ふ夜は潮の香に包まれて　　〃

◎三三四　なぜ潮の香なのか、いろいろ想像してしまいます。少し艶めかしい雰囲気もあり気になる句です。

○善一　海辺の宿で夜入浴を済ませ、窓を開けてすずしい風に当たっていると、海の潮の香がほんのりと入り、わが身をつつんでくれる、いい気分だ。

チケット実名制は誰のため

最近、何万何千ものファンが殺到する音楽ライブでは、入場に際し顔認証や身分証明書によりチケット購入者本人の情報との照合が行われ、本人でないと入場できないという、実名制の厳格化が行われるようになった。これにより「黄牛」と呼ばれるダフ屋によるチケット買い占めが難しくなった。その一方で、代理予約購入という商売が生まれ、個人情報が流失し違法に利用されるというリスクが増している。

現在全国各地でのコンサートや音楽ライブの開催状況は爆発的に回復しつつある。今年の上半期に開催された営利性のライブ（娯楽施設でのショーなどは含まない）は19万3300回、観客動員数はのべ6233万6600人で、前年の10倍になった。1つのライブのために全てをかけるファンと同時に黄牛も大興奮だ。ファンたちが待ちに待ったコンサートのチケットはますます入手が困難になり、コンサートそのものよりも話題になるほどだ。そして黄牛は強気で値段を吊り上げる。

そのような中、実名制は確かに不正転売対策にはなるだろう。だが、個人情報の保護や消費者がチケットを払い戻す権利にも配慮して、さらに制度を改善するべきである。流失した情報はその後ずっと個人の人身や財産を脅かす。不要になったチケットを売買できないのであれば、消費者保護の観点から払い戻し方法を改善するべきである。

（『中新ネット』2023年7月27日）

高齢者付添いで家賃無料

このほど、浙江省杭州市浜江区民生局が打ち出した「多世代居住による高齢者支援プロジェクト」に世論が注目している。1か月に10時間以上高齢者の付添いをすることを条件に高齢者福祉施設が無料で標準的な居室を提供するというものだ。すでに第2次まで試験的募集と運用がされており15人が付添いサービスを実施している。いずれも若い層が主体で、警察官、教師、医師などだ。現在第3次募集が行われており、15人から20人が選ばれる予定だ。

社会の発展に伴い、高齢者福祉のキーポイントは高齢者の心の幸福に移ってきた。核家族化や「子育てで老化を防ぐ」という観念が薄れたことで、多くの高齢者が孤独という問題と向き合うこととなった。プロジェクトは若者の参加によって、高齢者の生活面の介助に役立つだけでなく、高齢者に交流と相互作用の機会を提供する。プロジェクトは現実的には社会人になったばかりの若者にとって魅力のあるものになっている。さらには老人福祉サービスにおける人手不足を緩和する試みともいえ、このような人に優しい試みはさらに広げていく価値がある。

（『銭江晩報』『羊城晩報』2023年8月10日）

恋愛結婚サイトを公益事業で

中国青年報社の社会調査センターは問巻網と共同で2004人の未婚の青年に対するアンケート調査を実施した。その中で現代の若者の恋愛を阻害するものが見えてきた。

朱さんは２０００年代生まれの大学生。去年彼氏ができた。彼女曰く、今の若者は自ら「閉じこもり」、失敗を恐れ、裏切られたり傷ついたりすることを恐れ恋愛ができないのではないかという。中にはその先の結婚、家の購入、子どもが生まれたらと考え出し、問題を回避するため恋愛をしないことを選ぶものもいる。

朱さんは大学の「良い恋愛講座」に期待している。カウンセラーには入学してすぐ恋愛に関する選択科目の受講を勧められた。当時は何の役に立つのかと思ったが講座で学んだことは恋愛の役に立っている。たとえば、親密な関係への対処、恐れてばかりいないこと、自分に正直になることなどを学生に教えてくれる。

北京の某事業単位に勤める周さんは幾度か青年の親睦活動に参加したことがあるという。彼女は多くの人が結婚しないのは、知り合いが少ないからだと思っている。関係当局や職場には若い人同士の交流の場を多く設けてもらいたいという。「たとえば、同窓会や読書会などは学生時代の気分に戻れ、共に進歩も実感できる。野外のイベントもいい。ただ、内容が過密で疲れるものはだめ。交流の時間を阻害するし、参加意欲が低下するから」という。

アンケートに答えた青年のうち58・7％が、共産主義青年団が積極的に交友イベントを展開してくれることを望んでおり、48・2％が大学が恋愛講座の開設をして青年の正しい恋愛観を確立するのを手助けするよう提案している。さらに32・9％が国が公益事業として結婚恋愛サービスサイトを立ち上げてくれることを望み、26・6％が既存の結婚仲介業者やマッチングサイトに対する規範づくりや管理監督の強化を求めている。

（『中国青年報』２０２３年８月17日）

その人探しは違法では

「地下鉄金台夕照で見かけた白のシャツに黒のズボンの男性を探しています。とても混んでいて…」。こうした交際を目的としたインターネット上の書き込みはよくあるが、中には写真や動画まで添えて投稿する場合も少なくない。

某ＳＮＳ上の人探し電子掲示板の閲覧数は、「全網找人」で１億に迫り、「地鉄找人」では３２００万回以上にのぼる。某ショート動画アプリでも上記２つの閲覧数はそれぞれ29億６千万、２億３千万回に上る。人気の動画は１００万回以上再生され、10万ものよい評価を集める。多くの写真や動画は本人の側面、正面の角度から撮られたものだ。

コメント欄には一目ぼれからの人探しを応援する声のほか手掛かりも寄せられ、中には似ている人の個人情報や、容姿やファッションへの評価、私生活への憶測まで書き込まれることがある。さらには、ネット民の力で本人が特定できた場合、年齢や職業、恋愛事情まで晒されることがある。

北京京師弁護士事務所の許浩弁護士は、「全網找人」に上げられている写真や動画は盗撮とみなされ、他人の権利を侵害するものであると述べている。投稿者は肖像権やプライバシーを侵害しているということだ。

また、民事的責任だけでなく、行政罰として治安管理処罰法により、５日以下の拘留または５００元以下の罰金、重いものは10日以下の拘留に加え５００元以下の罰金に処せられる可能性があるという。

（『北京晩報』２０２３年８月17日）

協会通信

◆令和5年度第6回理事会の議題（9月21開催）

9月は下記内容で審議を行った。

・確認事項

7月20日に開催された第5回理事会の議事録（案）が確認された。

新会員2名（山﨑由美子氏、山口直樹氏）の入会と、1名の資格変更（成川敏夫氏：協力会員→正会員）が承認された。

・報告事項

①国際交流委員会より、今年度の事業に引き続き新規に「太原市植林事業（3年次）」に応募した。

②事務局報告

11月16日の理事会終了後に、協会ビルの防災訓練を実施する。

◆「新会員歓迎会」の開催

11月30日㈭午後2時より、当協会5階会議室で4年ぶりに開催します。

コロナ禍で開催できなかった2020年度から今年度までの対象者は28名。

講談師の神田伊織さん、宝井小琴さんに講談をご披露いただき、その後懇親会となります。

会員の参加費は1000円、参加される方は事前に事務局までお申込みください。

（事務局長　竹前栄男）

会員だより

◎新会員

〈正会員〉

成川敏夫氏（協力会員から資格変更）

山﨑由美子氏

山口直樹氏

同好会だより

〈俳句会〉

対面とオンラインでの俳句会を開催しています。

〈謡曲会〉

松木千俊先生のお稽古は一人ずつの個人指導です。

みんなの写真館

群馬県宝徳寺　（表紙）

群馬県桐生市にある宝徳寺は、臨済宗大本山建長寺第73世仏印大光禅師を開山として、桐生地域の領主であった桐生佐野正綱公の開基により室町時代の宝徳年間（1450年頃）に創建された禅寺です。毎年11月中旬、境内にある100本以上のもみじが紅葉し、見ごろを迎えます。赤や黄色のもみじが床に反射し、28畳の床に紅葉が映り、「床もみじのリフレクション」は幻想的な風景を作り出しています。庭の紅葉は夜にライトアップされ、寺の床は鏡のように反射し、昼とは別の美しさを見せてくれました。2022年11月に、この景色を自分の目で見るまでは「床もみじ」の存在は知りませんでした。あまりの美しさに圧倒されました。

（姜晋如）

国際善隣協会派遣の訪中団　（表4上）

国際善隣協会がJICAの基金で招請した中国外交部アジア司長胡正躍氏を団長に、訪日友好代表団を受け入れた。その答礼として2006年6月19日古海建一会長を団長に10名の会員が訪中して、戦後満州在住の邦人が葫蘆島港から、105万人が引揚げ帰国した現場を見学（いわゆる、前期引揚）、錦州市市長の現場案内と昼食の接待を受けた。北京に戻り旧外国人居留地の東交民巷にある中国人民対外友好協会で会談と宴会をして、再会を喜び歓迎された。

（新宅久夫）

第一回「一帯一路東京フォーラム」　（表4下）

2019年6月15日、一帯一路日本研究センターが主催した、第一回東京フォーラムが、プレスセンターで開催された。友好貿易時代の友人の大野氏が、日中一帯一路促進会を立ち上げ、事務局を担当した。一帯一路に関心のある、日中の関係者が多数集まり、学者・評論家・企業家などが参加した。その後、コロナ禍、ロシアのウクライナ侵略などで、活動中止の状態にある。

（新宅久夫）

2023年11月の行事予定

2日（木）　14：00　公開 第18回対面＆オンライン講演会
「「質」の向上に挑む中国―その変貌を読み解く」
結城隆氏（エコノミスト、多摩大学客員教授）

8日（水）　13：00　俳句会
兼題「黒」及び当季雑詠から5句を投句（10月末までに）

9日（木）　14：00　公開 第19回対面＆オンライン講演会
「みんなの知らないインド（バーラット）―日本と繋がる文化・歴史・政治」
久保木一政氏（元三菱商事、ジェトロのインド事務所駐在および連携、現在㈲インド総合研究所社長）

14日（火）　14：00　謡曲会（松木千俊先生お稽古）

16日（木）　14：30　自衛消防訓練（会員・テナント参加）

17日（金）　14：00　公開【善隣中国塾】（対面のみ）
塾長：矢吹晋氏（横浜市立大学名誉教授、当会学術顧問）

30日（木）　14：00　新会員歓迎会
※参加希望の方は事前に事務局までお申し込みください。

11 月 の 会 議 予 定

7日（火）	13：00	国際交流委員会	16日（木）	13：00	理事会（第8回）
7日（火）	14：30	講演委員会（Zoom）	16日（木）	15：30	広報委員会
14日（火）	13：00	環境委員会	22日（水）	13：00	東北委員会

※下線は通常日程に変更あり。

【12月初めの講演会予定】

7日（木）　14：00　公開 第20回対面＆オンライン講演会
「『周恩来の足跡』の翻訳・出版をめぐって」（仮題）
村田忠禧氏（横浜国立大学名誉教授、当会学術顧問）

ISSN0386-0345
二〇二三年（令和五年）十一月一日・毎月一日発行

「善隣」第五四一号（通巻八〇八）

発行所
〒一〇五-〇〇〇四 東京都港区新橋一-五-五
一般社団法人 国際善隣協会
電話 〇三-三五七三-三〇五一番（代表）

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION（IGNA）
https://www.kokusaizenrin.com